

第2回 羽村市産業振興計画懇談会 会議録	
日 時	令和8年6月26日（金）午前10時～午前11時55分
会 場	羽村市産業福祉センター iホール
出席者	座長 進邦徹夫、副座長 山下敬一 委員 城 裕昭、中条 悟、田村 聖、安田英司、瀧島忠典、田村 栄、坂本順市、清水亮一、鈴木直仁（芳賀啓一代理）、平塚徹也、河野浩邦、田中誠、鬼塚昌和、鈴木 茂 事務局 産業環境部長、産業振興課長、商工観光係長、商工観光係主査、農政係長、商工観光係主任
欠席者	青田昇一、中村勝司、星野亜弓
議 題	1 議事 （1）工業、建設等分野の現状・課題・方向性について （2）観光の現状・課題・方向性について 2 その他
傍聴者	なし
配布資料	・【資料1-1】第三次羽村市産業振興計画策定のための事業者アンケート ・【資料1-2】第三次羽村市産業振興計画策定のための事業者アンケート結果（工業系） ・【資料1-3】工業系事業者アンケート結果要約 ・【資料2】工業部会ヒアリング要約 ・【資料3-1】第三次羽村市産業振興計画策定のための市民アンケート ・【資料3-2】第三次羽村市産業振興計画策定のための市民アンケート結果 ・【資料3-3】市民アンケート結果要約 ・【資料4】観光協会ヒアリング補足資料 ・【資料5】観光協会ヒアリング要約
会議の内容	第1回産業振興計画懇談会会議録の確認 （事務局）事前に確認いただいた第1回産業振興計画懇談会の会議録（案）について、座長・芳賀委員から訂正の連絡があったが、その他訂正等はあるか。 ー訂正なしー 他に訂正がないようなので、今後、市の公式サイトなどにより公開していくこととしたい。 傍聴の確認 （座長）傍聴人の確認をする。 （事務局）本日の会議には、傍聴希望者はいないことを報告する。 （座長）傍聴希望者はいないとのことなので、早速、会議を始める。 1 議事 （1）工業、建設等分野の現状・課題・方向性について （座長）議事の1「工業、建設等分野の現状・課題・方向性について」を議題とする。事務局からの説明の後に意見交換や御意見をいただきたい。 （事務局）【資料1-1】～【資料2】説明 （座長）事務局から説明があったこの件に関し、委員の皆様に御意見を伺う。

(委員) 郵便局で現場を10年、企画立案等の仕事を20年行っており、その時の経験から「生産性の向上」あるいは「業務改善」について産業振興計画の中に盛り込んでいければと考え提案させていただきたい。まず「生産性の向上」については、事業所の第三者によるオペレーションの調査と改善、それに伴う助成金の支給と生産性の向上が図れた会社の社員によるセミナーの開催を提案したい。業務改善の一例として、家電量販店で家庭用プリンターのインクカートリッジを購入する際に以前、品番で探すのに大変な思いをしたことがあるが、現在は「メダマヤキ」という名前が表記されているのですぐに見つけることができた。他にも「サツマイモ」や「トビバコ」など名前が表記されていて、大変探しやすくなっており、これは1つの業務改善でありアイデアである。また、郵便局で経験したことでは、「ゆうパック」の配達委託業者を変更した際に、配達時間が守れない状況に陥りかけたことがあり、4名の管理者が夜間に配達を応援したが、家の場所が分からず表れもなく留守宅もあり、すごく効率が悪い状況で何個も配達ができず、違う方法を考える必要があった。そこで、配達委託業者の作業状況確認したところ、配達先の場所が分からず職員に場所を聞くことにすごく時間がかかっていることに気付いた。そこで、配達先について分からないことを事前書き出ししてもらい、配達先を熟知している職員が回答を作成している時間を使って配達準備作業をしてもらうようにしたら、配達効率がよく回るようになった。何が言いたいかというと、第三者の視点で見ることで業務が改善する効果があることが分かった。大企業の生産部門の社員に郵便処理作業の改善策を出してもらい、実際に作業に取り入れて改善が図れたこともあった。作業の手順を変えるだけでかなり改善されることがあるので、今回の各論の部分で取り入れていただければと思う。また、現場のオペレーションを可視化・分析して、組織への定着浸透を通じて生産性の改善を図る会社がある。例えばファストフードなどの店舗に行き、作業の流れを見て、改善点を指摘するといった会社である。羽村の事業所はいろいろな規模があると思うが、こういった会社による自社の業務改善に対して、その業務委託費用を補助するといったことや、生産性向上や業務改善セミナーを行うのも良いと思う。

(座長) 御経験に基づく大変貴重な御意見であると思う。資料1-2のアンケート結果からも分かるように、羽村市では従業員50名以下の事業所が非常に多いと思うが、どの程度の生産性向上や業務改善に活かしていくことができるかということですが、他に御意見はいかがか。

(委員) 業務改善については、結果が変わらないとそのプロセスを見直すことによって、逆にミスが出てしまうことを恐れているという感じもあるため、第三者の人に来ていただいて、会社としてもこれで仮にミスが出たとしても大丈夫だということを取り組むなど、実際の担当者が安心して取り組めるフォロー体制をとると、効果的に業務改善が進むのではないかなと思う。結果は一緒だが、仕事のやり方、進め方はいろいろあると思う。やはり、第三者が入って見ていただくことによって、そのプロセスが見直された結果、時間短縮が図れたなど、業務の質を上げることができるので、第三者による業務改善の取り組みは非常に良いことだと感じた。また、アンケートの中で32社中24社が31年以上、この他で創業されている。また、規模でいうと中小企業が割と多く、職住近接で働いている方が多いので、今回、行政とすれば中小企業対策で職住近接を含めて、羽村市の中で

活性化していくという建付けでよろしいか。そうすると、この最後の課題の方向性の中で、既存の企業に対する支援も重要だが、新規に羽村市に来て起業がしたいとか、あるいは他所で仕事をしていたが、羽村に移転したいと思うようなところを強化することも非常に重要なことであると思うので、その項目は別立てでやれるかどうかは別として、もっと皆さんの御意見をいただきたいと思った。

(委員) 資料1-3の最後で、課題解決に向けた工業施策の方向性ということで、一番上に人材確保と育成があり、4番目に外国人の活用とあるが、このふたつはイコールで考えていかなければいけない部分があると思う。先日、ある外国人採用関係の会合でいろいろと話が出ていたが、外国人の活用と定着支援は結構ポイントになっている。優秀な外国人を採用しようと皆さんがいろいろなアクションを取られているが、採用後、どう受け入れるかというのは意外に考えられていないという話があった。採用して現場に送り込み、社員にあとはよろしくみたいな会社もあり、その場合、なかなか定着しない。採用後の外国人の受け入れ態勢を構築しなければならないが、何から手を付ければいいのか分からないということがある。このあたりを行政として可能であれば、国別に文化や生活習慣などを含めて、外国人材の活用と定着支援体制整備の支援を強化すると、外国人の人材活用、採用や育成の改善が進んでくるのかと思った。

(座長) 外国人従業員については、資料1-2の2ページに人数が記載されているが、非常に採用が少ない状況のようである。

(委員) 考えて来たことがあるので、紹介・相談させていただければと思う。資料を一通り見て分析してみて、一番の重要課題は人材と事業の継続であると思い、ソリューションとして2つ挙げたい。人材は私の考えもあるが、皆さん御存知のとおり少子高齢化で人口自体が減っているのが、人材を採用するのはほぼ不可能な領域に来ているというのが一般常識というか、人の取り合いになっている。最近の方向性は人を確保するというよりは、AIとかITを駆使して、人がいなくても事業が回るような仕組みを作ることで、多くの企業がそういうアプローチをしている。羽村も是非そこにシフトして、方向性を後押しするような施策を打ってほしいというのが1点目です。ただ、そうは言っても人は必要で、人材を確保するにあたっての課題に、リクルートとか人材派遣会社の利用に対するコストの負担が大きく、そもそも募集ができないといったようなことがヒアリングの結果に書かれていた。そこで、海外や福井県坂井市で行っていると思うが、スキルマッチングプラットフォームというのを羽村市でも作ってみてはどうかと思う。無料で開放しているところが海外では多いが、羽村市はコンパクトな市なので、比較的簡単にプラットフォームが作れると思う。そうすれば、企業が市が提供しているプラットフォームにアクセスして、人材の募集や探すことができるし、就業を希望している方もそこに登録することで、職住近接が図れるなど、スキルとマッチングの効果が非常に高いと思う。

(座長) ご自身の知見に基づいて御提案いただいたが、他にいかがか。

(委員) 先ほどの委員が話していた内容は、私も同感である。行政や商工会の連携で雇用のマッチングプラットフォーム化を行っていただきたいと思っている。今、賃上げのトレンドはすごく活発になっているが、中小企業や零細企業にとって一番難しいのが賃上げである。やはり、その賃金と

いうところだけをフォーカスして人材を確保していくのはすごく難しい。働く側のトレンドがはたして賃金一択なのかということも含め、地域の会社が持っている個性の部分をしっかりと発信していける場としてプラットフォーム化をしていただけたらいいかと思う。どうしても民間の求人情報は、採用条件みたいなところを記入する欄しかなく、結論から言うとやはり賃金一択になってしまい、働き方の多様性というものを考えた時に、企業の魅力を表現できる場が意外と民間レベルでは少ないと思う。地域企業を支援していくうえで、企業の特長や個性をもう少しアピールして、職住近接でまちづくりをしていく中で、地元の人たちが働いてくれるような、そのような環境づくりを行政や商工会などが連携して作っていただけると小さい会社にとって会社の存在意義などを非常にアピールできる場にもなっていくと思っている。また、工業のところなので関連してくるが、オープンファクトリーのようなものを上手に活用していくこともひとつの選択肢になるのかと思っている。工業で仕事をしている仲間がいるが、その仲間の会社で何を作っているのか分からないことといったことがあるので、会社の情報を外に向かって開放することによって、会社を知ってもらえることに繋がり、それがまた雇用の促進に繋がっていくのかと思う。

(委員) 資料を読むと、一番の課題は人に関することなのではと思うが、支援ニーズとしては一番ではなく、即効性のある融資であった。やはり人を採用して育てるのはすごく時間がかかり長期戦になる。人の採用については、外国人採用の課題や工業部会のヒアリング要約の中でも人材確保が難しい、シニアがいいのではないかと、そういうお話が出ているが、やはり皆さんが欲しいのは若い人材ではないか。やはり育てるのは時間がかかるし、若い人材を採用して育てていくことを考えると、今お話があったスキルマッチングプラットフォームなどはすごく重要だと思う。また、私も実際にインターンシップのような形で学生と接している側からすると、学生が夏休み期間に企業訪問をするが、これは、どういう会社があるのかな、自分に合っているのかなといったことを肌身で感じながら、自分に合っているかどうかを確かめる機会だと思う。確かにプラットフォームでの情報発信も大事だが、合同説明会のようなものをやっていると同様にはいるが、その他にワークショップのような企業が学生を受け入れて企業のことを知る機会があると良いと思う。学生は、今売り手市場になっており、民間の就職情報サイトなどをよく活用する傾向がある。そうではなくて、地元や東京の西多摩地区にもこういう地域があって地元にも魅力的な会社があって働けるといえることを感じてもらうような仕組みがあるといいし、学生が就職前に希望する会社の仕事を経験できるような仕組みをまち全体で作ってもいいのかなという気がした。東京都の施策で「きづくインターンシップ」というのがあって、学生が夏休み期間中に利用している。また、同じ東京都の施策で「東京カイシャハッケン伝」では、自社の強みや、こういった人たちと働きたいんですよといったアピールをしている。羽村市でも、こういった就職の一手手前で会社の体験やワークショップができるといいと思った。やはり人に関することは、長期戦なので、すぐには効果が上がらないかもしれないが、やはり若い人を採用していくためには中長期的な計画を作りながらやっていったほうがいいかと思った。

(座長) 学生は今、儲かるところ、稼げるところの希望のほか、意外と地元

に就職したいという学生が増えてきている。今、羽村市の人口移動について調べてみたが、転入転出で2015年から2020年で見ると、20歳以上の人がガクンと落ちている。子ども達は増えているが、それは多分30代、40代の親世代の転入によるものだと思うのだが、若い人がずっと減っていて、60代以降が増えているので驚いた。若い人にいろいろな仕事があるということを分かってもらう何か方向性がないかと強く思っている。是非、若者を採用できる方策というものを御検討いただければと思う。

(委員) 我社では大学の授業に協力をさせていただいており、会社が出した課題に1年間取り組んでもらっている。また、大学を卒業する時に就職活動をして都内の会社に就職が決まっていたが、どうしても夢を捨てきれず内定を辞退して、アルバイトをしながらサッカーコーチをやっている子がいたりして、意外と労働条件さえ言えば賃金云々ではなく、地域の中で仕事をしたいという子たちが結構たくさんいる。私が理事をしているNPO法人でも、就職説明会を行っていて複数の若者が夢を追いかけたいため地域の企業で働きたいというニーズがあることを実際に捉えている。働くということを一面的にとらえるのではなく、多面的に捉えることで地域の企業に就職する動機を若者に与えていくことはできると思う。やはり、選択肢を与えていくことがとても重要なのではないかな。私が学生の頃の就職活動というのは、資料請求をして、会社説明会に行き面接を繰り返し内定が出たところでお世話になる、それが就職というものだと思っていたのが、今の時代はやはり若者達の考え方もすごく多様化してきていて、就職の形式というものも一択ではなくなってきた時代なので、逆に企業側がもう少し多面的に働くということ捉えて、仕組みを作っていくということはとても重要だと思っている。

(委員) 資料の中で、離職率が高いということが書かれているが、会社に定着してもらうためにどうしようかということだと思う。賃金とか福利厚生とかを見て、その会社で働きたいと考えられると思うが、私が重要だと思っているのは、仕事で褒められることは嬉しいことであるということである。以前の職場でコーチングセミナーがあった。コーチングというのは、対話を通じて相手の中にある答えや可能性を引き出す手法で、自発的な目標達成や問題解決を支援するためのコミュニケーションプロセスのことである。具体的に教わったことは、部下と対話する時に対面形式のことが多いと思うが、この状態は対立する構図であり良くないため、横に座って対話するといったコミュニケーションのとり方が良いという研修であった。また、傾聴のスキルという研修では、話を聞く、褒めるといった講習も受けた。こういったセミナーや研修を実施したらどうかと思う。自身の経験では、販売目標に達しない班のミーティングに参加し、職員の話をよく聞き、対話を大事にして、職員を褒めることによって目標を達成できた。ぜひ、各論の部分でコーチングセミナーの実施について触れていただきたい。

(座長) 建設業分野での御意見はいかがか。

(委員) 資材等の置き場に困ることが多いため、そういった土地の確保に注力していただくとありがたい。空いた土地を貸し出したりしてもらえると、空き地問題の解決とともに生産性の向上にも繋がってくると思う。

(座長) 業務改善や生産性向上、人材確保を中心について御提案や御意見をいただいた。次に観光をテーマに意見交換を行いたい。

(2) 観光の現状・課題・方向性について

(座長) 続いて、「観光の現状・課題・方向性について」を議題とする。事務局からの説明の後に皆様と意見交換や御意見をいただく。

(事務局) 【資料3-1】～【資料5】説明

(座長) それでは先ほどの工業・建設等分野と同様に、アンケート・ヒアリング結果を踏まえつつ、委員の皆様に御意見を伺う。

(委員) 私は、市内の7反の田んぼでお米を作る農業が本業で、おそらく東京で5本の指に入る生産量だと思う。観光協会ではいろいろな事業を手掛けており、収穫したお米を使ったお酒も造りましたし、チューリップまつりは私が責任者として10数年実施してきた。そんな中での羽村の観光についてだが、東西4キロぐらいしかないこの小さなまちは人が通過してしまい、足を止めてくれない場所であると感じている。自然を求める人は奥多摩に行ってしまうし、バーベキューをして川遊びであれば秋川や五日市、檜原方面へ行ってしまう。羽村というのは本当に足を止めてくれるお客さんは西多摩の中でも少ない。その中で観光を売り込んでいくためには、このアンケートの中にも書いてあるように、今あるものを一極集中で売り込んでいくしかないという考え方である。小学校の子ども達に羽村の絵を描いてもらおうと、ほとんどの子がチューリップの絵を描いてくれた。それでチューリップを観光の事業の前面に出そうということで始めたが、チューリップまつりについて何年前にアンケートを取ったら、マンネリ化していてつまらないし、規模も広がってなくて、何度来ても同じだという意見があった。そこで、今年はこんなことをやっていた、来年はどんなことをやるのかと思ってもらい、リピーターになってもらうためにできることを考えた。まず、羽村のチューリップまつりで皆さんに注目していただける観光の発見をして帰ってもらおうということを心がけていて、今年は「どこでもドア」を作成して設置した。また、メディアにも積極的にアピールし、読売新聞やテレビ局の天気予報のコーナー、東京都が提供するテレビ東京の番組で山之内すずさんというタレントが来てくれて、かなりの集客効果があった。アンケートの中にあるようにSNSをきっかけとした来訪は少ない。例えば奥多摩に行く方を、いかに羽村に取り込むか。ハイキングマップを作る際に、羽村には「羽村の堰」があり、「羽村の堰は江戸の母です」とアピールしているが、こういった観光の散策マップの始点ではだめで、終点でないとお金を落としてくれない。羽村の堰を観光して玉川上水を歩いてもらうことを考えたが、今年福生市の田村酒造が手掛ける「&KASEN」(あんどかせん)という施設がオープンしたことによって、恐らく最後は福生に行き、福生の街を見て帰ってしまう。そういうパターンになっている。逆に福生に来てもらって羽村で帰ってもらえばお金を落としてもらえる。こういった状況を良い方向にしようとかあがいている状況である。ヒノトントンZOOのように、市が運営する動物園は珍しいが、やはり管理運営面で資金が大変厳しく経営も厳しくなっていると聞く。人が来てもらえないことには活性化が図れないが、ヒノトントンZOOは駅から歩いて30分から40分かかってしまうので、電車で来た人はまず行ってくれないので、少し離れた場所にも行ってもらうための移動手段として、キックボードなどを取り入れようと企画している。また、羽村の特産品として何かないかと、羽村の魅力を考えた際に、羽村は伏流水を使っていて水道水がすごく美味しく、羽村の水田は7ヘクタール残ってい

て、多摩川水系では一番上流にあたり、東京都最上流の水田なので、これを農業資産としての観光名所にしたいと思い、5年前から羽村のお米、羽村の水、東京都産の麴を使ってお酒を造って、特産品として認めてもらっている。そこまでいくには行政から一切協力してもらえなかったが、今になって、羽村のブランド力をもっと高めたいと言われている。観光パンフレットも作るが、やはり興味のある人しか見てくれない。何をやっても興味がある人しか来てくれないので、興味のない人にもいろいろな分野から外堀を埋めていこうということを考えている。お米もそうだが、去年、福生市で開局したコミュニティ FM 局に、7月10日から毎月第2土曜日のお昼に30分間生放送で我々農家が出て稲作のアピールをすることになった。羽村の水田では市内に7校ある小学校の5年生が授業の一環で田植えをしている。田植えの体験をすることによって、さくらとチューリップの季節にその子ども達が戻って来てくれたらいいと思っている。先ほど人材確保の話があったが、今の若い人に聞くと、羽村より都会で働きたいという。だから20代、30代の人口が下がってしまう。地元の企業といってもなかなか就職は難しい。中小企業や零細企業の売上に対する人件費比率が一流企業は5~6割であるのに対して、8~9割かかってしまう。そういう中で開発費や人件費、研修費などは、なかなか出せないのが現状である。私は障害者のグループホームも経営しているが、人材確保というのは、非常に苦労している。外国人採用も視野に入れているが、そのプラットフォームはハローワークに作ってもらいたいと思っている。ハローワークが新しくプラットフォームを作って、もっと人を集めることをしてもらいたい。民間会社のプラットフォームを利用するのもいいが、公共機関をもっと利用した方がいいのではないかなと思う。観光に関しては、やはり通過されてしまうまちをいかにどうするか。だからラジオを使って、農業の放送をしていくつもりである。月1回、稲の育成状況を放送すれば、田植えをした子ども達の親が聞いてくれる可能性がある。親が放送を聞いて面白いと感じてもらえれば、そこから輪がまた広がっていく。そういったことで外堀を埋めていけば、羽村の関心度はどんどん上がる。その中で観光も面白そうだね、チューリップがあるんだね、ヒノトントンZOOにも行ってみようと、そうやってどんどん人を集めていければ面白いかなと思っている。ですから、観光だけの発信ではなくて、いろんなところからの部門で発信できれば面白いかなと思っている。ぜひ、皆さんで聞ける人がいたら、「ハローFM89.2MHz」を聞いていただきたい。また、以前インバウンド向けに座禅をやったらどうかという企画を考えた。実は、自然を楽しみましょう、何かをやりましょうと言っても、山の自然の中でハイキングしましょうは奥多摩に行ってしまう。バーベキューしましょうといってもあきる野に行ってしまう。その中で羽村はどうしたらいいんだろうと考え、羽村にはお寺が4つあり、全部禅宗である。そこに外国人が来てもらい、美味しいものを食べてもらおうとか楽しんでもらうことも他の町に負けてしまうので、思い切って座禅会を開いて、なおかつ、そこで自分で握った塩むすびを食べてもらおう体験してもらおうという企画をコロナ禍前にやった。旅行会社にもその企画は面白いと言ってもらったが、コロナ禍で実施できなかった。新型コロナも落ち着いて来たので、今年からまた企画を売り込もうと思っている。コロナ禍前のアンケートでは、外国人は日本の有名な場所に行っているし、有名で美味しい食べ物も大体食べ尽く

しているというので、多分日本に来て楽しみといったら、日本人の昔からの体験を観光に取り入れたら面白いのではないかというので、座禅を今計画している。話が前後するが、田んぼに関しての話に戻ると、「田んぼ復活プロジェクト」として、東京都の補助金を活用した取り組みを開始した。稲作を復活させようということで、市内の小学校の体験もそうであるが、この取り組みを通じて、いろいろなところへアプローチしていくことを考えており、これも観光に結び付けていく予定である。

(委員) 羽村でもお囃子とかお祭りなど、歴史がある伝統芸能が残っているが、これは羽村市の観光としてどういった位置付けなのか。青梅大祭は2日間で約25万人ぐらいの人が集まり、青梅市旧調布地区の6町が集まって行く調布大祭では、バイパスを通行止めにして、通りいっぱいに出で大変賑わっている。羽村のお祭りやお囃子などについて、産業振興計画に取り入れられているのか分からないので質問させていただいた。

(委員) 青梅大祭は実行委員会が組織されているが、羽村の春祭りは神社が主体であり、宗教行事という位置付けになる。青梅大祭も宗教行事ではないかと我々外部の人間は思ってしまうが、青梅大祭の素晴らしいところは、それを宗教行事ではなく、実行委員会形式でお祭りを行っているが、羽村のお囃子や山車が出るお祭りは宗教行事としての神社のお祭りである。観光協会で仕切ってほしいという話もあったが、地元の団体などいろいろと仕切る会があり、そこを飛び越えて観光協会が口を出すわけにはいけないので、これまで通りのやり方を変えずに神社主体でやっていく方がまとまることになる。あえて観光事業にせず、伝統行事として引き継がれているという側面もある。お囃子も全部同じ流派ではなく、神田囃子や重松流囃子であったりとみな違う。各神社独自のやり方を尊重している。羽村は小さなまちなので、皆さんが仲良く話し合ってお祭りが運営できている。それが現状である。ただ、本音を言うと人が集中するので、観光事業としてできたらなという考えもある。同じ時期に桜が咲いているので、別のお祭りとして桜まつりを計画して、並行して開催している。

(委員) 私も観光協会の理事をやっている。たぶん観光の捉え方には点と面があって、点の話は先ほど委員がほぼ全部お話しいただいたと思うので、面の話でいうとやはり先ほどその点の話でもあったが、羽村に人が降りない、留まらないというところが一番の課題かと思う。ただ、これを西多摩という面で捉えたときには、西多摩という地域に人が滞留する仕組みを作れると思っており、我々民間側ではできない部分が広域における連携であると思っている。行政の方たちにはまず、西多摩という広域での観光連携ということを推進していただきたい。場合によっては、今ある観光の広域組織のDMO化みたいなものも含めて、羽村発信でいろいろなものを取りまとめてもらえると嬉しい。また、NPO法人で理事をやらせていただいていて、インバウンド誘致のテストマーケティングというのをやったことがある。コロナ禍前ではあったが、香港からバス1台の観光客を羽村に呼ぶ企画を行った。その時に一番人気だったのは、新鮮な野菜を畑でただ採るということだった。香港は土に触れて収穫するという機会がほぼないという国なので、土に触れるという体験だけでも観光資源になる。我々からすると当たり前風景が彼らにとっては当たり前ではない、そういう資源が西多摩にはたくさん残っているのではないかと考えている。また、小作駅前の飲食店でご飯を食べる前に、どうしてもドラッグストアに寄りたいと

言うのでドラッグストアに行ったら、30人、40人の香港の人たちの買い物で商品の棚が空っぽになるくらいの購買力というのが当時あった。やはり面で抑えていくっていうことができてくると、インバウンドの需要も拾ってくるのかなというように感じている。また、東日本の地図を広げて圏央道を見ると、羽村がちょうど圏央道のおへそ部分に位置する。そうすると羽村を拠点にすることで、ほぼ東日本の世界遺産だとか、日本を代表する観光地というところに、レンタカーを借りて圏央道を使えば、日帰りで行って帰って来られるという距離感である。羽村はまちがコンパクトなので、泊まったとしても市内を徒歩でほぼ回れる距離である。ダイレクトに観光資源を作って誘致するだけではなくて、日本を楽しんでもらう外国人の人たちのねぐらというやり方もあるのかなというのは個人的に思っている。その中に個の努力の部分における体験型コンテンツをしっかりと作っていくことによって、少し遠出をする人、戻ってきて近場で休みながら楽しめる時間というこの組み合わせの中で、この西多摩の滞留の地として羽村が活きてくると他の自治体の資源を利用しながら経済的にひと稼ぎできるのではないかと考えている。

(委員) 観光施策について、コンセプトは先ほどの皆さんがお話しいただいたとおりだと感じているので、どう集客するか、アピールするかというところにフォーカスした施策を3つ提案させていただきたい。1つは、ARの観光マップです。先ほどインバウンド話題がありましたが、多言語対応のものもすぐにできるのでやった方がいいのではないかと思います。大事なものは中身であり、例えば横浜でもやられているEバイクやEモバイルとかパッケージ化をきちんと用意して、ただ何があるよだけではなくアピールするのがよいのではないかと。例えばピクニックセットとかを用意して、ネット上で予約が全部できて人を介さずに、例えばEバイクを借りられたり、パッケージ化されているルートを通っていくというのがあらかじめ全部完結していて、その中で小売りとか飲食店、これもパッケージの中にきちんと入れて用意しておくというのが大事かと思っている。2つ目が、大事なものは小売りの方ですとか、飲食やEバイクとかもそうですが、ネット上で全部予約とか決済だとか、これを個別にやるのではなく、例えば市がクラウドにプラットフォームを作って予約や決済をみんなが共通してできるような仕組みを作ってしまうのではないかと思います。そのプラットフォーム上で在庫管理や流通であるとか、行政でいうと納税がそこで完納できるとか、そこでトータル的に全部できてしまうようなものを用意すれば、小売りの方や飲食店の方も、アピールや進出もしやすいのではないかと。3つ目は、ターゲットをVIPやセレブに振り切ってしまうのではないかと。幸か不幸か差別化が今、非常に日本はすごいので、思い切ってVIPやセレブにフォーカスした環境パッケージを作ってしまうのではないかと。例えば、水が綺麗、おいしいというのであれば、その水を使った高級レストランを作り、パッケージ化にして売り込むだとか、これはシンガポールでやっているが、ヒノトントンZOOの貸し切り、VIPの方が予約して、1日貸し切りで楽しめるようなプランを作るであるとか、あとはナイトサファリとして、夜だけでも貸し切れるとか、そういうVIPの方とかセレブの方向けに高級志向のものを用意してあげれば、どんどん栄えるのではないかと。これは、差別しているわけではなくてそういうことによって、市内産業が活性化し、お金が落ちてくるので、市民も

連動してどんどん栄えていくと思うので、お金をどんどん落としてもらう。そういう方策に環境をもう振り切ってしまうばいいのではないかと考えた。

(委員) 事務局や委員のお話をお聞きしたりして、まずは既存のもの、あるものでしっかり観光を栄えるように努力していることが見受けられた。チューリップまつりで毎年違うことをやっていることを私も知らなかったのも、やはりそういう意味ではいろいろやっている中でも周知をする、認知してもらうというところがやはり弱いのかなとすごく感じている。今の時代だと、一時期はグーグルなどインターネットで調べたりというのが主流であったと思うが、先ほど事務局からも説明があったとおり、InstagramとかX（旧ツイッター）などのSNSが普及しているという中で、羽村市公式PRのInstagramのフォロワー2,729人に対して、お隣の青梅市の公式アカウントは約13,000人のフォロワーがいる。やはり、そういうところでもPRの手法とかに少し差があるのではないかと考えている。先ほどのチューリップまつりで毎年違うことをやっているという話があったが、今Instagramを見てみると、チューリップまつりの投稿が羽村市公式サイトには掲載されていなかったりするので、今後どうやって認知してもらうのかというところは、もし行政だけでは厳しいのであれば、外部にお願いしたりして、しっかり投資をしてお金を出してでもPRしていくことが必要だと思った。

(座長) 他に御意見はいかがか。羽村はすごくリソースというか売れるものはたくさんあると思う。ですが本当に皆さんがおっしゃるとおりで外に発信をするということとか、あとターゲットिंगというのはなかなか難しいところであるので、その辺を良い方向で考える必要がある。羽村自体の都市のブランディングというのでしょうか、こういうことも含めて考えていく必要があると思うが、今羽村でブランディングに関しての取り組みは何かあるのか。

(事務局) 今、羽村市で行っているのは、「子育てしやすいまち」、そういったブランディングを行っているところだが、観光に特化したブランディング戦略については、現在大きく取り組んでいる状況ではない。

(座長) 千葉県流山市では、「母になるなら、流山市。父になるなら、流山市。」ということで、ブランディングをして人口が5万人増えたといわれているが、先ほどからお話が出ている職住近接を目指すまちづくりをしていくんだということであれば、例えば、観光も将来的に住んでもらうことを目的にして、ちょっと羽村に来てもらい羽村の魅力を感じてもらうことで、今後羽村に住み続けるみたいなそういう方向性に持っていくとか、全体の羽村市としての方向性と観光施策を結びつける考え方もありかなと思います。そういう形にしていくと、羽村市も観光に投資しようということ、お金を支出してもらえないのではないかな。子育て支援ではないんですけれども、チューリップまつりやその後の水田耕作に子ども達が参加しているという話もあり、子ども達が交流し、一度羽村を出ても羽村っていいところだよと戻ってくる子ども達もいると思う。あとはインバウンドをどういうふうにするかということも考えなければならないかなと思う。

(委員) 今、羽村という名前が出ているが、全国の他の地域に行くと、羽村を「ハネムラ」と呼ばれる。私が若い時のことだが、子ども達がシニア野球で全国大会に遠征に行った際に「ハネムラさん」とよく言われたが「ハ

ネムラ」ではなく「ハムラ」ですよと言いつけたら「ハムラ」と言われるようになった。何が言いたいかというと、やはり、羽村市の情報をとにかくたくさん発信することが、羽村市を知ってもらうことに繋がっていくと思うので、羽村市という名前を広める努力をしてもらえればと思う。

(委員) 大きな話が出ているところ、小さい話で恐縮であるが、今はそんなことはないが、以前、観光案内所の通りに面したところに掲示物がたくさん張り出されていて、内容もバラバラで、期限が過ぎたものもあり気になっていた。観光案内所の外観を魅力あるものにできないかなという思いがある。また、玉川上水や堰に小学生が見学に来るが、玉川上水に子ども達がまた来てくれるようにしたいと思っていて、玉川上水周辺をテーマにした水彩画コンクールを羽村市主催で実施し表彰するとか、2つ提案させていただく。

(座長) 玉川上水の社会科見学というのは、窓口はどこになるのか。

(事務局) 小学校4年生の社会科見学で羽村の堰と郷土博物館に来て、玉川上水の歴史について学んでおり、区部からも多く来訪される。基本的に担当は教育委員会になる。都内の多くの小学生が見学に来ているのではないかな。

(座長) 見学に来た場合に、羽村の堰だけ見て帰ってしまうのか。

(事務局) 郷土博物館と羽村の堰周辺を見学して、お弁当を食べて帰るというパターンが多いのではないかな。そこから市内を回遊してもらえんといういが、現状としては、郷土博物館、堰周辺だけで帰ってしまうことが多い。

(座長) 例えば工場見学もパッケージにするといいいかなと思うがどうか。

(事務局) 玉川上水は歴史を学ぶ授業としてのもので、工場見学はまた別の授業になるかと思われるが、トヨタ自動車羽村工場でも小学生の社会科見学を受け入れている。ヒノトントンZOOも近いので、1日かけて羽村のことを学びたいというような機会があれば情報提供していきたい。

(座長) 西多摩地域を面で捉えたお話があったが、西多摩地域で取り組んでいる活動は何かあるか。

(事務局) 大多摩観光連盟や8市町村で構成する西多摩広域行政圏協議会では観光の部門もあります。また、羽村市・福生市・瑞穂町の2市1町でそれぞれの地域を結ぶような図で観光ルートを検討したりだとか、資料にもありましたが、羽村市観光協会では武蔵村山市観光まちづくり協会と連携した羽村山口軽便鉄道の跡を巡るイベントを実施するほか、他の観光協会と連携した街あるきイベントを実施していると伺っています。

(座長) 連携した取組は大事だと思うので、今後も進めていただければと思う。他に御意見はいかがか。特になければ、議事に関して終了したい。円滑な議事進行への御協力ありがとうございました。進行を事務局に戻します。

2 その他

(事務局) 事務連絡

円滑な進行、活発な意見交換や御意見をいただき、ありがとうございました。次第の2、その他について、事務局から2点ございます。1点目、本日の会議録については、第1回と同様に、事前に御確認いただき、第3回の懇談会冒頭で訂正等を確認させていただきます。会議録(案)が調製できしだい御連絡するので、よろしく願いたい。2点目は、次回、第3

	回懇談会は7月31日（金）午前10時から会場はこちらのiホールで御予定をお願いしたい。それでは、これで本日の会議を終了させていただきます。長時間にわたり、御協力ありがとうございました。 補足（委員退席時に事務局へ言付け） 春の神社の祭りについては、青梅と同じように神社と切り離して、実行委員会などで実施できるとよい。切り離して実施できなくても、地域資源なので積極的に観光協会などがSNSで発信したほうがよい。SNSで発信することによって、市外からの集客が可能。自身が経営する飲食店も、お客様のインスタグラムによる発信を見てお店に来てくれた人もいる。
--	--